

銀

賞

『凍み炭団』

凍み炭団（しみたどん）

島根県 出雲高等学校 一年 内部泰成

「寒さが凍みいなあ」

村の外れ、雪がしんしんと降る帰りの山道。十兵衛はかじかんだ手に白い息を吐いた。寒さよけのミノをはおつてはいるが、そいつの中に穴があいて、時折ひゅうと雪が入つてへる。早こうじ、新しきミノを調達しなくては。ずいぶん前からやつ思つてゐるが、中々できない。

十兵衛は、山奥で炭焼きをして暮らしている。冬のこの時期になると、むいせり炭団を麓の村に売りに出て生計を立てていた。十兵衛の炭団は火持ちが良いからと村人たちの間でも重宝された。山を下りれば、炭団を買おうとする村人の列ができるほどだった。

しかし、それも昔の話だ。近頃は、どうやら外から行商が来るらしい。しかも、十兵衛よりぐいちょいに安く炭団を売つてゐるといふ噂だ。当然ではあるが、十兵衛の方はとうと、とんと炭団が売れなくなつてしまつたのだった。

今日も変わりはなかつた。あぜ道を歩いていると、通りすがりの母子に出会つた。十兵衛は「炭団は要らんですか」と声をかけようとしたが、その母親は露骨に嫌そうな顔をこちらに向けて、足早に去つてへつた。またある老婆は、炭団こそ買え、ぶつきらぼうに「三つ」と語つて、炭団をひつかくように掴み取ると、投げつけるように錢をバラ撒いていった。

十兵衛は村人たちのあまりの変わり様に戸惑っていた。行商の炭団が安いといえど、十兵衛は自分の炭団に誇りを持っていたからだ。火持ちの良さでは他のどんな炭団にも負けない。そう思っていた。しかし、現実は厳しかった。以前と変わらず十兵衛からいつも炭団を買ってくれるのは、とうとう村の庄屋さんだけになっていた。庄屋さんだけは「昔からの付き合いだから」と、十兵衛の状況を知つてからはずか、十兵衛の持つてきた炭団はごつそりと買っていってくれた。ただ、そう何度も庄屋さんのところに行けるわけもないし、買い値もそこまで良いと見えるほどではなかったので、結局のところ十兵衛の生活は貧しいままなのであった。

やつとのことで重い足を上げ、十兵衛が山頂の掘つ立て小屋に辿り着いた頃には、辺りはすっかり暗くなつていた。

「はあ、大分遅くなつたわ。早く炭団に火い点けんと」

十兵衛は呟いた。細々と枝を伸ばす木々が何とも寂しい雰囲気をたたえる。こんな寒い冬の夜は炭団の火で温まるのが一番だ。

十兵衛が小屋の戸に手をかけた、その時。後ろの茂みで、がさがさと音がした。振り返つて田を凝らすと、そこには「匹のたぬきの姿があつた。

「おお、兵吉。おつたかや」

十兵衛は嬉しそうに声を上げた。兵吉も、むぐりと立ち上がると、まるまると大きな体を揺らして、十兵衛のもとに駆け寄つた。

「寒からう、寒からう。今から炭団の火い点けえん、ほれ、入れ入れ」

十兵衛はそう言つて戸を開けた。兵吉は頭をもたげて、のそりと小屋に足を踏み入れた。

十兵衛が兵吉と出会つたのは麓の村から帰る道中のことだつた。兵吉が山道で、足を怪我して歩けないでいるところを十兵衛が見かけたのだ。恐らく村人の誰かに鉄か何かで殴られたのだろう。かわいそうに思つた十兵衛は兵吉を家に連れ帰り、怪我の手当をしてやつた。腹をすかせて、風だつたのでさつまいもを分けてやると、兵吉は喜んでかぶりついた。そんなことがあつてから、兵吉は十兵衛のもとによく顔を見せるようになつた。「兵吉」というのは、十兵衛が自分の名前から「兵」の字を取つて付けた名前だ。十兵衛は、それはもう、目に入れても痛くないほどに兵吉を可愛がつたのだった。

「今日も炭団は五つしか売れりんだったよ。新しい二つは当分お預けだの」

十兵衛は火鉢に炭団をくべながら苦笑いして言つた。兵吉は田をパチクリとやせて、十兵衛に頭を擦り寄せた。

「兵吉、お前はほんにかわええのぉ」

十兵衛はそつと兵吉の頭をなでた。兵吉の頭はふさふさで柔らかかつた。

幾分か経つて、十兵衛は火箸を手に取つた。灰を崩すと、中から煌煌と燃える炭団が顔を出した。炭団はじんわりと辺りを真紅に染めていく。ああ、炭団の色はいい。いつ見てもうつとりする。十兵衛は思つた。膝の上の兵吉に口をやると、十兵衛と同じようにほんやりと炭団の火を眺めていた。

なんて幸せな時間なんだろ、と十兵衛は思つた。膝上の兵吉の温もり、炭団の静かな温もり。その両方が、疲れ切つた十兵衛の心を癒してくれた。永遠にこのまま、この温もりが続けばどんなによいだろ。十兵衛はほのかな温もりを感じながら、やがて深い眠りに落ちていいくのだった。

翌朝、十兵衛は畠の上で田を覚ました。兵吉の姿はもう無く、炭団も火鉢の中で灰に埋もれていた。

十兵衛は顔を洗つて支度をすると、すぐに山を発つた。昨晩はかなり雪が降つたようで、戸を開けると外は一

面真っ白に覆おおわれていた。この前雪ぐつを出しておひて良かつた、と十兵衛は思った。

冬の冷たい風が顔に当たると、妙みょうな心地良さがある。山道を歩きながら、十兵衛はどじかすつきりした気分を感じた。……ただ、今日も一つ思うところがあるとすれば、干していた炭団が少なくなつていただろうか。十兵衛はいつも火鉢のそばに作った炭団を干している。山を下りるときはそれを竹籠たけかごに積み込むのだが、どうもこの頃、その炭団が減つているように感じるのだ。もちろん氣のせいかもしれないし、減つていたとて、兵吉がいたずら心で盗つていったのだらう。どうせ売れないのだし、少々減つっていても別にいいか、と十兵衛は気にしないことにしていた。

麓の村はどじか活氣立つっていた。年の瀬せが迫せつっているからだらうか。田姓ひやくしやうにとつて休みといえども正月二日が日へらいのものだし、新年が来るとなむと誰だれしも氣がはやるのだらう。

十兵衛がいつも道を歩いてくると、何やら賑やかな声が聞こえてきた。何だらうかと思つて声の方へ近づいて見ると、路肩ろかたに人だかりができている。

「ははあ、あれが噂の行商か」

十兵衛は立ち止まって言った。人だかりの大きさからしても、噂通り流行つてゐるところが分かつた。十兵衛も行ってみようとした、その瞬間じゅんかんである。人混みの中から、すつと黒い影かげが飛び出した。十兵衛は、一瞬それが何だかよく分からなかつたが、その影を見て絶句した。その影は十兵衛のよく見知つた顔だつたのだ。

「兵吉だ、どうしてお前が……」

そう、影の正体は兵吉だつたのだ。兵吉は十兵衛に気がついていないようだ、十兵衛の方には脇田わきだも振ららず、山の方に忽然じつぜんと消えていった。

つい昨晩身を寄せ合つたはずの兵吉が、どうしてここにいるのか。十兵衛の商売敵とも言ふる、この行商のところに……。十兵衛の中でも不穏な思いが渦巻いた。十兵衛は突然と立ちすくんでいたが、しうらしくてぐつと拳を握りしめ、人混みの中へ向かつた。とにかく行商のもとに行つてみない」とには始まりない。そう思ったのだ。

「へい、買つてらっしゃい、見てらっしゃい。ここには何でも揃つとうぞ」

行商は若い男だつた。男の言う通り、路肩にはいろいろな品が置いてあつた。薄団、木桶、木綿布……確かに生活に必要なものはみんな手に入れられそうだ。村人たちに人気なのも分かるな、と十兵衛は思った。

品物を見渡してみると、木桶の隣にやはり炭団の山があつた。十兵衛は前に恐る恐るやつて来て、炭団を一つ手に取つた。

「違うな……」

炭団は、じく普通の炭団だつた。十兵衛は、氣の抜けたように胸を撫で下ろした。

「炭団を賣いに来られたんですかい？」

その時、行商の男が十兵衛に話しかけてきた。

「え、いや……」

急なことで返事に窮した十兵衛に、男は続けた。

「そんない、おずいからこの炭団を試しに差し上げますよ。使ってみて、良かつたらまた買つてください」

男はやのひのと、奥から炭団を二、三個取つて十兵衛に渡した。十兵衛は再び言葉を失つた。重厚な質感に、きらりと輝く黒色。それは正真正銘、十兵衛が作った炭団だつたのだ。やつぱりか、這樣的思いが全身を貫いた。

「これは、おのの作った炭団でねえか」

十兵衛の口からそう漏れた。

「え？」男の顔から笑みが消えた。

「聞き捨てなりんな、お客さん。そりや一体どうこうひつた？」

男は語気を強めて言った。

「お、おらは近くの山で炭焼きをしとるもんだ。色形見ても、この炭団は間違いなくおらが作ったもんだ」

十兵衛は負けじと返した。

「ほお、この炭団はあんたが作ったもんだと。そいまで言つんなり、ちゃんと証拠があるんだろうな？ 色形なんかじやなくて、誰が見ても分かる証拠だよ」

男の言葉に十兵衛はぐつと押し黙った。手間ひまかけて炭団を作つている十兵衛にとりては自分の炭団を見分けるなど、造作も無いことだ。しかし証拠を出せと言わると、それは出しようがない。

「無いだろ？ でたらめ言つて妨害しようつつてもそつはいかねえ。迷惑だ、さつやと帰るんだな」

男は鋭く言い放つた。周囲にいた村人も、陰険な視線を十兵衛に向けっていた。十兵衛には、もう対抗する術は無かつた。村人たちの嘲笑を背後に感じながら、十兵衛は来た道を引き返すのだった。

しかし、行商の男が差し出した炭団は間違いなく十兵衛のものだった。恐るべく、「お試し」で火持ちの良い十兵衛の炭団を村人に渡し、それ以降は普通の炭団を売る算段だったのだ。そうやって行商は村人たちに炭団を売りつけていたのだ。

どうして兵吉が行商のところにいたのか。その答えも、もはや想像ではなく確信に近かつた。きっと兵吉もその行商の手先だったに違いない。十兵衛の田を盗んで炭団を行商のもとに届けていたのだ。いつも炭団が減つて

いるような気はしていたが、そうか、そういうことだったのか。十兵衛の中で悶々とした感情がぐるぐると駆け巡った。

十兵衛は腹わたの煮えぐり返るような思いだった。昨晩も一緒に炭団の火に当たつていたというのに。兵吉は、自分の味方だと信じていたのに。……そうではなかつたのだ、自分は騙されたいたのだ。十兵衛の頬を一筋の涙が伝つた。

やつのことじで十兵衛は山の上に辿りついた。歩いていくと、視線の先に、小屋の前に立つ黒い影が見えた。兵吉だった。兵吉は十兵衛の姿に気付くと、ゆっくりと近づいてきた。

いつもなら十兵衛は「兵吉!」と言んで駆け寄るところだ。だが、今日は違つた。十兵衛は、黙つて背中の籠に手を伸ばした。そして、炭団を手に取り、兵吉に向かつて思いきり投げつけた。

「お前はおのりの味方だと思つとつた。んだじも、違つたんだのう、兵吉。お前は、ハナから行商の手先だつたんか!」

十兵衛は怒鳴った。胸にこみ上げてくる熱いものを抑えられなかつた。

炭団は、兵吉の足をかすめた。兵吉は思わず真上に跳ねた。

「もう一度と、顔を見せるな!」

十兵衛は声を振り絞つて言つた。

兵吉は口をパチクリと開けて驚いたよつな顔をしていたが、やがてもの言つたそつに十兵衛の顔を見上げた。が、十兵衛が再び籠に手をかけると、きつと踵を返して吹雪の中に消えていつた。

十兵衛は帰つてからも炭団の火を点ける気にはならなかつた。それどころか、炭団を見るのやう嫌だと思つ

た。炭団を田にすねど、つい胸が詰まつて苦しくなつてしまつたのだ。

十兵衛は思い立つたように立ち上がつた。雪ぐつに足を入れ、炭団でいっぽいの竹籠を背負つた。この炭団は庄屋さんあげてしまおう。そんでもつて、もう炭団を作るのは止めにしようか。十兵衛はそんなことを思いながら口を開けた。じせりへ止んでいた雪が、再びちりつき出していた。

山を下るのにそんなに時間はからなかつた。十兵衛は庄屋さんのお屋敷の前に来た。屋敷は茅葺きの見事な造りで、手入れされた梅やら松やらが雪をまとつてなんともきれいだ。

十兵衛はそつと門をくぐり、玄関の戸に手をのばした。そのときだつた。戸の奥から人の話し声が聞こえた。

「……わむ、占めて銀十匁じゃな、今月の分しかと預いた」

一人の声は庄屋の爺さんのものようだ。十兵衛は耳を口にあてて、息を潜めた。

「ふえふえ、こつも炭団の」とお世話になつてますから、銀十匁じゃあ、安いへりこですよ」

相手の声に十兵衛は思わず声を上げそくなつた。声の主はあの行商の男だったのである。十兵衛は田の前が真つ暗になるような気がした。どうして行商が「」にいる。「こつも炭団の」とお世話になつてる」とは一体どうしたことだ。庄屋さんがずっと自分から炭団を賣つてくれていたのは、おやか……。

行商の男は続けた。

「そういえば、あの炭焼きの男が今日来た話はやつきましたけどね、その前に変なたぬきも来たんですよ」

「ほへ、たぬきかね」

「ええ、ちよつどその時は客に例の炭団を渡そうとしたんですがね。そこにそのたぬきが入ってきて、炭団を取ろうとしたんだ」

行商の言葉に、十兵衛は自分が大変な勘違いをしてしまっていたことに、ようやく気付いた。あの時、兵吉は行商に炭団を渡していたのではなかった。十兵衛の炭団を田にして、それを行商から取り返そうとしていたのだ。「あんまりしつこいんで蹴り飛ばしてやつたら、逃げていきましたけどねえ」

「炭団なんて欲しがるとは、そりやあまた馬鹿なたぬきがおつたもんだな」

庄屋と行商の二人はケタケタと笑った。

十兵衛は気づけば、山道へ駆け出していた。居ても立つても居られなかつた。十兵衛は、己の勘違いを悔やんだ。どうして兵吉が行商の手先だと決めてかかつてしまつたのだろう。兵吉は十兵衛のために炭団を取り返そうとしていたというのに、自分は兵吉に何をした？ 炭団を投げつけ、怒鳴り散らし……。十兵衛はもの言いたげに自分を見上げた兵吉の顔を思い出した。きっと兵吉は、自分を見損なつてしまつただろう。当然だ。自分はそれだけのことをしてしまつたのだ。兵吉は本当に唯一の友だつたというのに。

山を下りるときは止んでいた雪は、今や吹雪となつて十兵衛に襲いかかる。十兵衛は、雪粒が顔に打ち付けるのも気にせず山道をひたすら上り続けた。

十兵衛は兵吉に申し訳ない思いでいっぱいだつた。ただ、やはり一つ気がかりなのは、小屋の中の炭団が減つてしまつたことだ。十兵衛以外に小屋に入れたのは兵吉だけだ。当然、炭団が少なくなつていたのは兵吉の仕業に違ひなかつた。でも、一体なぜ。行商に持つていつたわけではないなら、一体兵吉は炭団をどこに持つていつたといふのか。

十兵衛が山頂の小屋に着いた時、そこには誰の姿も無かつた。代わりに、白い雪の上に、今にもかき消されてしまいそうな足跡があつた。それは少々変な形の足跡だつた。片側だけ妙に細長い形になつてゐるのだ。それが

何重にも重なつて、森の方へ続いていた。

十兵衛は迷わず、足跡を追つて走り出した。きっとこの足跡が兵吉のもとに連れて行つてくれる、そう信じて。足跡は十兵衛がやつと一人通れるくらいの獣道を延々と続いていく。何度も木々の枝が十兵衛の邪魔をした。吹雪も強くなるばかりであった。

いつしか、道といえるような道はもう無かつた。十兵衛はただ足跡だけを頼りに、吹雪の中を、森の奥へ、ひたすらに走り続けた。走りながら、叫ぼずにはいられなかつた。「兵吉、兵吉！」と。

足跡はついに、小さな洞穴の前で終わつた。十兵衛は、身をかがめて穴に入った。そして、音葉を失い、へなへなと膝をついた。

「兵吉、そんな……」

十兵衛の目の前で、兵吉はもう冷たくなつていていた。すぐそばには炭団がいくつも転がつていていた。真つ黒なままで、氷のように冷たい炭団だった。

「馬鹿だな。火ひつけてないのに、あつたかくなるわけないだろ！」

十兵衛の声は震えていた。

兵吉の後ろ足に田をやると、恐らく十兵衛の炭団が当たつたであつたところが不自然にへこんでいるのが分かつた。十兵衛はおかしな形の足跡を思い出した。十兵衛が山を下りている間、兵吉はけがを引きずりながらも、何度も何度も小屋までやつて來たのだろう。十兵衛を探して。そしてつぶつぶで力尽きてしまつたのだ。

十兵衛の目から涙があふれれた。

「ほんとに馬鹿だよ、おうは。兵吉は、また来てくれたのに。おうは……」

続^つきはもう声にならなかつた。十兵衛は兵吉の上に突^つつ伏^ぶして嗚咽^{おえつ}を漏^ららした。

十兵衛にとつてそうであつたように、兵吉にとつてもまた十兵衛は唯一の友だつたのだろう。兵吉にとつても、十兵衛と炭団に身を寄せた時間は幸せなものだつたのだろう。なぜ兵吉が炭団を何度も洞穴に持ち帰つたのかも、今の十兵衛には痛いほど分かつた。

外の二つの足跡はこの吹雪ですっかり消えて、無くなつてしまつた。穴のなかでは十兵衛の悲しい、悲しいむせび声が、冷たい炭団に静かに響^{ひび}くだけであつた。